

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520677

研究課題名（和文） 聖地創造のポリティクスと場所の再構築に関する地理学的研究

研究課題名（英文） Geographical study on the politics of creating sacred places and reconstruction of the place.

研究代表者

松井 圭介（MATSUI KEISUKE）

筑波大学・大学院生命環境科学研究科・准教授

研究者番号：60302353

研究成果の概要（和文）：

本研究では、カトリック教会群や「キリシタン文化」と呼ばれる長崎の宗教的な歴史・文化が、現代のツーリズムとのかかわりから、どのように観光資源化されているのかを検討し、宗教的な聖なる空間が観光地として構築されていく様態を検証した。その結果、聖地は社会経済的、政治的、文化的、あるいは宗教的といったさまざまな目的をもった意味ある主体の思惑によって、創造され、新しい意味を付与されていることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to examine how some religious historic cultures named "Cristao" in Nagasaki prefecture become modern tourism resources, and how religious sacred places are constructed as tourist areas. Tourism commodification of a pilgrimage to a sacred Christian place is also performed in the Goto Islands beside Hirado-City. Sacred places serve purposes that are socio-economic, political, cultural and the religious in nature. These purposes give meaning to the subject (person) according to his or her intentions, which gives new meaning to these sacred places.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文地理学・人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：聖地創造，場所の再構築，観光戦略，観光資源，世界遺産，キリシタン，ツーリズム，門前町

1. 研究開始当初の背景

現代社会では、聖地はポリティカルな存在として、絶えず創造と再構築とを反復している。このような聖地創造と場所の再構築を理

解するうえで、ツーリズムという視点は有効である。聖地を観光資源として利用する動きは、全国各地で顕著にみられる現象であり、地域社会における聖地創造にかかわる実証

的な解明は重要な課題であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、観光資源としての聖地の有効活用を企図する地域社会側のアクターと、観光資源化に伴う聖地の側の適応的戦略を、現地調査により実証的に解明することを通して、聖地という特別な意味を持つ場所の創造・変容・再構築にかかわる地域動態を分析することである。具体的な研究課題としては、(1) 商品化される聖地巡礼とその課題、(2) 聖地をめぐるツーリストの動態、(3) 社会経済的な環境変化に対する門前町の適応的対応、の3点に取り組むこととした。

3. 研究の方法

日本における聖地をめぐる場所のポリティクスの動態を実証的に検討するために、国内複数地域における現地調査を実施する。特に長崎県平戸地区、上五島地区におけるキリシタンの事績やそれに関連するカトリック教会群をめぐる観光資源化とホストの側の適応戦略および千葉県成田市における成田山新勝寺門前町の地域変容に焦点をあてる。

4. 研究成果

本研究により明らかにされた知見は以下の通りである。

(1) 商品化される聖地巡礼とその課題

長崎県の観光戦略のなかで「キリシタン」は重要視されており、具体的に商品開発がなされたのが「長崎キリシタン紀行」である。「キリシタン紀行」のコンセプトは、「高級志向・高付加価値」にある。いわゆる団塊の世代をターゲットとした少人数・ガイド付きのこだわりの旅であり、料金は高くてもゆったりして、しかも歴史や文化を学びたいという欲求に応える商品として企画された。

こうした教会めぐりを聖地巡礼として促進する動きはカトリック教会側からも起こっている。2005年にはカトリック長崎大司教区監修による『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』が刊行された。本書では、殉教者を偲ぶ巡礼地ガイドとして、各地の殉教地や記念碑、墓地・墓碑、セミナリオ跡などを提示し、それらを聖地巡礼としてアピールしていく手段の一つとして、教会群や殉教の聖地巡礼を打ち出している。

長崎におけるキリシタンの聖地巡礼を、宗教的意図のみならず、地域の歴史的文化遗产として、また観光振興の手段として活用しようとする動きは、2007年に「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界文化遗产のわが国における暫定登録リスト入りを契機として、さらに高まりをみせている。長崎県観光連盟では早速、「新しい文化の創造“ながさ

き巡礼”の創設に向けて」と題した観光資源活用を打ち出した。ここでは、長崎県内各地に残る有形・無形のキリスト教関連の資産を再検証し、カトリック長崎大司教区との協議の上、公式の「ながさき巡礼の道(ルート)」というオーソライズされた新しい巡礼の道を創造し、長崎県の観光振興に寄与すること期待されている。具体的な活動指針としては、長崎大司教区との協働による「巡礼地」の選定と巡礼の道づくりに始まり、巡礼のマナーや公認ガイドの育成、「ながさき巡礼マップ」等を作成し、イベント開催や各種メディアを通して広く情報発信をしていくことが挙げられている。こうした企画を受けて、長崎大司教区では、2007年5月に「長崎巡礼センター」を開設しスタッフを配置している。長崎県内の巡礼地と巡礼関連地を巡礼のモデルコースとして紹介するほか、カトリック史などに詳しい巡礼ガイドを派遣するなどの対応も始めた。

このように、「ながさき巡礼」は既存の教会や殉教の聖地をルート化するものであるが、その背景にはさまざまな要因がある。つまり、巡礼発展による観光客の増加を期待する地元自治体の政治・経済的な要請、カトリック側の宗教的理念と布教戦略、スピリチュアルブームといった社会的・宗教的状況、団塊の世代の退職期に伴う文化遺産観光への関心の高まりなどを背景に、「ながさき巡礼」という社会的な聖地創造への取り組みがなされているのである。

(2) 聖地をめぐるツーリストの動態

教会をめぐりに来た人は、上五島の教会をどのように感じているのだろうか。上五島内の教会に設置された雑記帳のうち、5教会(大平、中ノ浦、土井ノ浦、大曾、江袋)のデータをもとに分析を行った。

信仰者の場合、すべての教会を巡ることを意識している人もみられる。例えば「上五島の29の教会を訪問したいと参りました」が好例である。巡礼者が教会を訪ねたとき、そこで得られる体験は多様であるが、心の安らぎや落ち着きを感じたと記述する人が多い。

「心の落ちつく場所であり、ふるさとです」、「とても心安らぐ教会です」といった例は、教会一般で体験されるものと同一と解釈するよりも、上五島におけるキリシタンの歴史と風土、離島という地理的な位置などが相まって生じてくる体験であると考えられる。こうした信徒のまなざしは、教会の建造物に関してもその審美的・芸術的な価値だけではなく、「(信徒の)皆様が堂内を美しく飾っているのをみせていただき感謝いたします」のように、教会を支える人々の暮らしや営みそのものへの感謝の念が示されている。カトリックの信徒にとって上五島の教会は、ヒーリン

グ（癒し）が得られる特別な場所であり、こうした聖なる力の源泉は上五島のキリスト教史や人々の生活、風土が融合して作り出されたものであることがわかる。

これに対して、カトリックの信徒を除く一般の観光客や地元の人の場合はどうであろうか。動機をみると、海水浴や釣りなどの目的で来島して随伴的に教会を訪れる例や新婚旅行や定年後の旅の目的地として上五島に来た人も多い。他方で、自分や親戚の故郷として上五島の教会を訪れる人も少なくない。またカトリック文学（遠藤周作）に惹かれてその舞台である上五島に来た人や念願の初来島を楽しみに来た人もあった。上五島の出身者が帰島の際に教会による例はたくさんみられるが、必ずしもカトリックの信徒とは限らず、むしろ一度島を離れた人が、自分の上五島出身者であるアイデンティティを確認する行為として教会を訪問していることが考えられる。

観光客は教会で何を感じたのであろうか。顕著な特徴として、島の歴史に関して記した人が複数みられたことが指摘される。なかには歴史観が大きく変わった旨の記述もみられた。こうした歴史への追憶は「建造物の歴史が教会を建てて維持してきた人々の営みである」こととの理解にもつながっている。このように上五島の教会を訪れるという行為は、観光客にとって歴史観の再構築にもかかわる重要な体験を与えうるが、島民や親類縁者を島にもつ人にとっても、「先祖がこの島で一生懸命生き、信仰を守ってくれたこと」に対する感謝の念を醸成し、ひいては島出身者のアイデンティティを確認・強化する行為となっていることがわかる。

教会を訪問することによって得られる体験は、非信徒である観光客においても、宗教的な体験と類似した構造をもっている。例えば「心の安らぎ」や「落ち着き」、「心休まる」、「苦しみが癒される」といったヒーリングやリラクソスの感覚は信徒のそれと共通している。なかには漁業関係者でかつて漁をしていた海を想い、祈りを捧げている人もみられた。

一方で信徒と比較して特徴的な表現として、教会の建造物の美しさや立地の素晴らしさに対する評価を挙げることができる。その結果、非信徒であっても「教会の美しさに魅了されて、福江・中通島を回っている人も珍しくない。こうした教会の価値の審美的評価は、「いつまでも大切に守り続けてほしい」といった感想に接合される。美しい教会と教会が建てられた島の歴史、そしてそれを守り維持してきた人々の生活、これらの要素が結合して、教会が文化財的価値を有するものとして来訪者に認められているものと考えられる。

(3) 社会経済的な環境変化に対する門前町の適応的対応

成田市の中心市街地の形成は新勝寺の表参道を核とする門前町を起源としている。明治期以降、鉄道網の敷設により東京からの日帰りが可能となった新勝寺は参詣者が増加し、成田駅と新勝寺の途上に位置する花崎町や上町にも参詣者向けの店舗が立ち並び表参道となり、1960年代にかけて中心商店街としてにぎわった。しかしながら交通利便性の向上による観光・参拝者の日帰り化の進展に加え、講社による集団参拝から個人参拝へという参拝様式の変化、モータリゼーションの進行に伴う動線の分散化などを要因として、新勝寺周辺の旅館は廃業もしくは飲食店・土産物店への業種転換を余儀なくされることとなった。

こうした業種転換の動きは、1978年の成田空港開港や1980年代以降の成田市周辺地域における大規模小売店舗の開設などの外部要因によっても促進された。1990年代になると、こうした商店街の状況に危機感をもった店主を中心として、まちづくり協議会が組織され、行政とともに街づくり事業が遂行された。1996年から始まったセットバック事業およびファザード整備事業による外観の整備は、2000年以降、電柱類の地中化埋設事業に接合され、表参道としての景観の修景・創造が進められた。これらの景観整備にかかわる街づくりの事業の先導的役割を果たしたのは上町である。新勝寺と成田駅の間位置する上町は、仲町や花崎町と比べて通過交通量が少なく、商店会としての危機意識がもつとも強い地区であった。セットバック事業やファザード整備事業には反対する店舗もあったが、2009年時点で約九割の店舗で両事業は完了している。この結果、歩道は拡幅され表参道としての景観が整備され、来訪者の評判もよく、国土交通省による都市景観大賞を受賞（2005年）するなど、上町のハード面のまちづくりは着実に成果を収めつつあるといえる。

このようにまちづくりの方向性は、同じ表参道であっても各町会によって異なるが、本研究で対象とした成田市の中心市街地は、門前町的な機能を残す町として、また中心商店街として商業・サービス業が十分に機能し、中心市街地の空洞化が進行していない地区であると考えられる。このことは何よりも、講社による団体参拝は減少したものの、成田山新勝寺が有数の観光・参拝者をひきつける寺院であり、モータリゼーションが進展した現在においても、表参道の歩行者通行量が大きいことが要因である。同時に空港建設を契機として、成田市および周辺地域には巨大なインフラ整備に投資がなされ、それらが豊か

な雇用機会を創出し、首都圏 50~100km 圏に位置する地方中心都市として、恵まれた社会・経済的状況にあることも指摘されよう。さらには、絶えず商業地域としての存続に対する危機感が底流にあり、内発的・自発的なまちづくりの取り組みがなされることにより、業種転換を図りながら、時代の変化に対応し、商業空間を維持してきたのである。

以上のように、新勝寺と門前町との関係を宗教ツーリズムの経済学という視点からみると、互恵的な関係にあることが指摘される。参拝者は宿泊や飲食、土産物・記念品の購入において、門前町に依存する一方で、門前町は各種イベントを通年的に開催し、参拝客の周年化を企図してきた。すなわち門前町は新勝寺と相互依存しつつ、社会的環境の変化に対し、適応的に対応してきたと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

(1) Matsui Keisuke 2010. Commodification of a Rural Space in a World Heritage Registration Movement—Case Study of Nagasaki Church Group. Geographical Review of Japan 82:149-166. 査読有

(2) 松井圭介 2010. 宗教ツーリズムの展開と聖地の空間変容. 宗教研究 84:162-163. 査読無

(3) Saito Joji・Matsui Keisuke 2009. Characteristics of Tourism in Tateyama: Tourist Area in the Southern Region in the Tokyo Metropolitan Area. Tsukuba Geoenvironmental Sciences 5:31-39. 査読有

(4) 橋本暁子・松井圭介ほか 5 名/7 番目 2009. 成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容. 地域研究年報 32:1-41. 査読有

(5) 松井圭介 2009. 宗教ツーリズムの生成と課題. 宗教研究 83:162-163. 査読無

(6) Matsui Keisuke 2008. Recent Trends in the Geography of Religion in Japan. Geographical Review of Japan 81:311-322. 査読有

[学会発表] (計 15 件)

(1) 松井圭介・齋藤譲司・上坂元紀: 五島列島におけるキリシタン・ツーリズムと世界遺産運動. 日本島嶼学会駒澤大会・三宅島シンポジウム, 2010 年 9 月 11 日, 駒澤大学.

(2) 松井圭介: 宗教ツーリズムの展開と聖地の空間変容. 日本宗教学会, 2010 年 9 月 4 日, 東洋大学.

(3) 松井圭介: 文化遺産観光と農村空間の商品化. 日本地球惑星科学連合 2010 年大会,

2010 年 5 月 23 日, 幕張メッセ.

(4) 齋藤譲司・松井圭介ほか 4 名: 成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容. 人文地理学会, 2009 年 11 月 8 日, 名古屋大学.

(5) 松井圭介: 宗教ツーリズムの創造と農村空間の商品化. 日本地理学会, 2009 年 10 月 25 日, 琉球大学.

(6) 松井圭介: 宗教ツーリズムの生成と課題. 日本宗教学会, 2009 年 9 月 13 日, 京都大学.

[図書] (計 10 件)

(1) 松井圭介 2011. 『宗教とツーリズム』世界思想社, 印刷中.

(2) 岩間信之編 2011. 『フードデザート問題—無縁社会が生む「食の沙漠」』農林統計出版, 215 頁.

(3) 佐藤大祐 2009. 『レジャーの空間』ナカニシヤ出版, 18-28.

(4) 松井圭介 2009. 『観光の空間』ナカニシヤ出版, 31-41.

(5) 松井圭介 2009. 『離島に吹くあたらしい風』海青社, 23-40.

(6) 松井圭介 2008. 『現代宗教 2008』秋山書店, 168-195.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 圭介 (MATSUI KEISUKE)

筑波大学・大学院生命環境科学研究科・准教授

研究者番号: 60302353

(2) 研究分担者

岩間信之 (IWAMA NOBUYUKI)

茨城キリスト教大学・文学部・准教授

研究者番号: 90458240

佐藤大祐 (SATO DAISUKE)

立教大学・観光学部・准教授

研究者番号: 20405616